

中世の村

北陸地方における中世前半の村は、広大な敷地の中に単独の家屋が散らばって点在する「散村」でしたが、時代が下ると、複数の家屋が集まる「集村」の形態へと移ります。集村の成立は、地域によって時期が違い、加賀国では、14世紀後半より散村から集村へと変わっていきます。散村から集村への移行は、諸説があり明確な理由は分かりませんが、結果として、結合力の強い村落共同体が生まれ、惣村そうそんが成立していき、戦国時代に各地で巻き起こる一揆へと繋がります。

郷クボタ遺跡や二日市イシバチ遺跡は、13世紀後半～14世紀の散村の状況を見ることができます。村は、居住用の掘立柱ほったてばしらたても建物2、3棟と、倉庫と推測される竪穴状遺構1基で構成され、周りには、耕作地などの園地えんちと宅地を区画する溝が周囲を囲っています。

一方、14世紀後半～16世紀前半の三日市A遺跡と徳用クヤダ遺跡では、複数の掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸などの遺構が密集して確認されており、家屋などが集まった集村の様子を見ることができます。